

## Contents ▶

1 アメリカ高等教育機関の今～ハーヴァード大学での経験から 2 国際教養大学視察訪問（報告） 3 建学の精神を核として

## 1 アメリカ高等教育機関の今～ハーヴァード大学での経験から

人文学系 准教授 大中 真

本年7月23日に、大学教育開発センター主催の学内シンポジウムで、昨年度の特別研修の経験についてお話をさせていただく機会を得た。場を設けていただいたセンターの方々、ならびに当日ご来場いただいた皆様に改めて感謝申し上げるとともに、小欄で概要について報告したい。

ハーヴァード大学は、各種世界大学ランキングでも常に第一位を占める、1636年創立の米国最古の高等教育機関である。ノーベル賞受賞者や各国の国家元首を多数輩出してきたことでも知られる、世界のエリート校の頂点に立つ大学である。しかし、筆者が見たハーヴァードは、現状には全く甘んじておらず、どうすれば現在の教育および研究の水準を維持できるか、また世界中からの高い評価に耐えうるだけの高等教育機関足りうるかを、どこまでも食欲に追及していた。

いかに各国から優秀な留学生を集めてくるか。これは米国の他の大学でも、そして日本でも、本学でも、大学運営にとって重要な要素であろう。ハーヴァードには、昨春卒業した、中国の習近平国家主席の娘さんに象徴されるように、アジア系とりわけ中国や韓国から、優れた才能を持つ大量の若者が在籍している。学内では、中国人学生の存在感の大きさが際立つこと、また中国研究の隆盛を目の当たりにした。他方で残念なことに、もともと少なかった日本人留学生の数は減少する一方で、短期・中期滞在の日本人研究者の数も、近年大きく減っているという。

指摘しておかなければならないのは、こうしたハーヴァードの世界戦略を支えているのが、莫大な寄付金である。卒業生や財界からの潤沢な資金が、数多くのプログラムや奨学金を維持している。ハーヴァードの強みは、在学生、その保護者、そして卒業生たちの強烈な愛校心、それに寄付によって自らの知名度や満足度を上げようとする起業家や経営者、篤志家たちの存在にある。

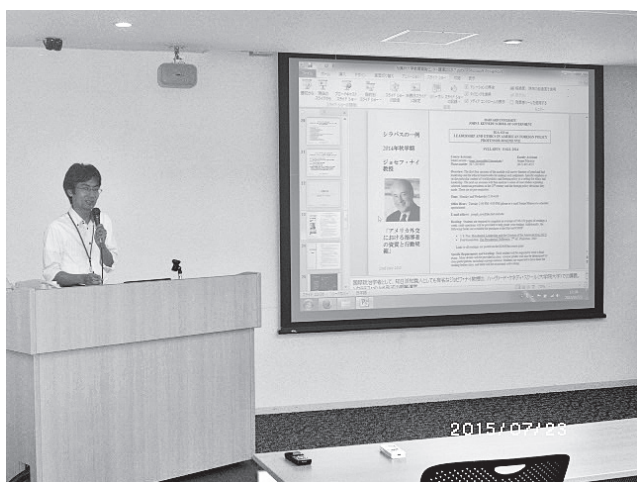
筆者は滞在中に数多くのセミナー、シンポジウム、授業などに出席したが、本稿では特に、授業改善プログラムについて紹介したい。学内最大の組織がFAS (Faculty of Arts & Sciences) と呼ばれるリベラルアーツ教育組織であり、筆者が所属した歴史学部はここに位置付けられる。このFASの中に、授業改善のためのセンター (Derek Bok Center for Teaching and Learning) があり、その活動の一つとして、専任教員のための授業改善プログラム (Talking About Teaching) が存在する。

同プログラムは、毎年春と秋に開催され、教授法の工夫を重ねている教員が登壇し、参加者と一緒に実践例を体験、終了後に質疑応答を行う、というものである。筆者はむろん、一訪問研究員でしかなかったが、事務局に打診したところ参加を快諾していただいたので、実際にプログラムを体験することができた。スキル（技能）についてはもちろん参考になったが、それ以上に印象的だったのは、若年か

ら定年間際の年長者に至るまで、ジェンダーや国籍を超えて、幅広い層の専任教員が多数出席し、自己の教授法を高めるために何をすべきか、極めて真剣に白熱した議論を展開していたことである。

ハーヴァードといえば、研究一辺倒の印象を事前に持っていたが、よい意味で固定観念が覆された経験だった。組織もしっかりしており、資金も潤沢であることはこのセンターについても言えることだが、教員も職員も、大学生生き残りのための危機意識を強く共有していることが、一年間の滞在を通じてあらゆる局面で強く感じたことである。

最後に、本学に应用可能かもしれない施策として、(1) 現在のFDを発展させた授業改善プログラムの導入、(2) 既存の提携関係を活用したExchange Professor制度の導入、(3) 学生だけでなく、教・職員の近隣大学との連携強化、(4) 学群を超えた教員の共同作業、以上の4点を提言させていただいた。



## 2 国際教養大学視察訪問（報告）

教育支援課 松ノ下昭人

2015年6月25日（木）、秋田県にある国際教養大学にセンター長山本、研究員阿部、糸川、松ノ下4名で視察訪問を実施した。今回の視察訪問では、同大学 学長秘書 鈴木和代氏にコーディネートして頂き、留学、入試についてそれぞれ担当されている方にご対応頂いた。また、理事長・学長 鈴木 典比古先生との面会も実現した。

はじめに、大学案内のDVDを視聴したあと、国際センター長 磯貝 健氏 より留学に関する説明を受けた。教育全般、学生生活に関することなど幅広い分野についてもお話をお伺いすることができた。

次に、入試室アドミッションズ・オフィス 森田 香奈子氏より入試に関する説明を受けた。大学案内、入学者選抜要項、更には入学者選抜状況一覧表など詳細な資料に基づき説明をいただいた。

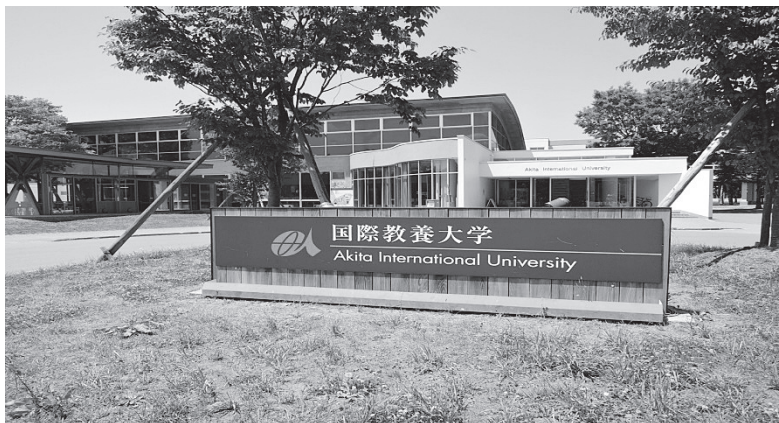
次に理事長・学長 鈴木 典比古先生との面会では、我が国の教育政策に関連したお話から、ご自身の経験や同大学の教育内容の詳細、また経営トップとしてのお立場から政策的なお話し、さらには将来展望にまで踏込んだお話をお伺いすることができた。



最後に、施設見学（教室、図書館、食堂、学生寮など）もさせていただいた。

今回の視察訪問では、わずか創立11年目にして、我が国のグローバル人材育成を牽引するまでに成長を遂げた同大学の秘訣を垣間見ることができた。直接対面してお話しをしていく中、学校案内やウェブサイトだけでは決して得る事のできない貴重な内容であったと感じている。また、施設や環境などを直接見ることによって、学生の様子、学内の雰囲気も感じることができた。

この出張における詳細については、今年度末に発行を予定している「大学教育センター年報」に掲載を予定している。



国際教養大学 キャンパス入口



国際教養大学 図書館



理事長・学長 鈴木 典比古先生との面会

### 3 建学の精神を核として

本学特任准教授・大学教育開発センター客員研究員 兼田 麗子

戦前に同志社で学んだ清水安三は、北京で中国民衆の子女教育に従事した。この清水を生涯にわたって支援し続けた人物の一人が倉敷紡績やクラレなどを経営した大原孫三郎である。戦後に帰国した清水は、孫三郎の子息、總一郎の支援も得て、オベリン大学に因んだ桜美林学園を創設し、次のような建学の精神を掲げた。「桜美林学園はキリスト教主義の教育によって、国際的人物の育成を目的とする。本学園の理事だった故大原総一郎博士はそご生前、『百年後の日本』と題する懸賞文を募ってはどうかと、政府に提案されたが、果たして百年後に日本なる国が、世界の地図の上になお存在しているであろうか、私はひそかに心配している。日本国民は、世界にかつてない非攻非戦主義のパシフィックな憲法を持っているが、果たしてパシフィスト精神を持っているであろうか。そこに、日本の存亡の問題が存している。日本国民が、軍備を用いずに祖国を護ろうと思うならば、少なくとも周囲の各国民の感情を害してはならぬ。常に、周囲の各国民との間に、意思の疎通を図るべく努めねばならぬ。では誰が、周囲の国民に、日本国民程に beloved nation “愛好すべき国民” はないと、思わせ得るであろうか。それは、語学の達人である。よって本学は、我が国の周囲の国々の言語を教えんと欲するのである。更に、語学だけでは足りない。己を愛する如く隣人をも愛せよ、と教えるキリスト教を、みっちり教えるべきである。かくてキリスト教主義と語学、この二つをよく体得した人材を能うだけ多数教育せんとするのが、本学の建学の趣旨である」と。

清水安三のこの言葉は、今もってタイムリーであり、心に響くものがある。昔も今も、桜美林大学の特長なのである。

編集発行：桜美林大学 大学教育開発センター

〒194-0294 東京都町田市常盤町 3758 桜美林大学 其中館1階 101 TEL.042-797-2918 FAX.042-797-6398

E-mail : [fdcenter@obirin.ac.jp](mailto:fdcenter@obirin.ac.jp) Web : <http://www2.obirin.ac.jp/fdcenter/>